Engineer's Spirit

大沢 由雄
（昭和31年機械科卒）

朝の東京事務所での光景である。「XXさん、サウジから電話ですよ」別の場所で執務しているXXさんに聞こえるように大きな声である。急ぎ執務を中断して電話に出た。「XXです。ご苦労様です。何かあったのですか？」との対話で話は始まる。この間、急病人でも出たのかな、事故でもあったのかな‥‥と不吉なことが頭を去来する。

電話のやりとりは「ドライバー10本ほど送ってくれないか。船便でなく航空便で頼む」、「ドライバー10本ですね。プラスですかマイナスですか？」、「ドライバーは木、木だよ」語気は高まる。「把手はプラスチックでなく木ですね。それでサイズ(長さ)は？」、「ドライバーの長さは国際的に概ね決まっている。人数も多いので適当に3種類ほどでいいよ」更に語気が強まる。「費用項目は福利厚生費でいいよ」、「ドライバーは工具であり福利厚生費ではないですよ」どうも両者の話が噛み合わない。把手は木であることだけは判明したが、聞き手の問い「プラスかマイナスか、サイズは？」の答えにはなっていない。話し手は「福利厚生費」での話しで、ことは通じたものと思い込み、聞き手は「工具」との思い込みが消え去らない。両者はイライラが積もり、ついに話し手は「工具の話でない。ゴルフの話だよ」との一言で話が通じた。聞き手は砂漠だけの環境ではゴルフとは予想もしなかったことである。「それではサンドウェジ、パターはどうするのですか？グリーンはあるとは思われないが？」と念を押すが、「グリーンはその気になればすぐにも出来る。ブルドーザ、スクレーパー、ローラー等々の建設機械は手元にあるし、サウジは産油国で芝に代わるアスファルトはいつでも簡単に手に入る。そんな心配は無用である。今日は取り敢えずゴルフ用のドライバー10本だけだ。しかも航空便で頼む」との「天の声」で一件落着である。

どうも話の始めに「ゴルフ用の」一言が抜けていたようである。時間から考えると時差の関係からサウジは朝の3時過ぎである。派遣された人たちの仕事から来るストレス解消を一日でも早く解消しようとし、また国際電話の料金を考えての「天の声」の主の思いがやっと分かった。「ゴルフボールを思い切り叩いてストレス解消に繋げよう」との思いがすぐさま聞き手の次の行動となった。やはりEngineerは口数が少ないのが誤解を招いてしまったようである。しかも「天の声」の主は生まれも育ちも秋田県であったのも背景の一つであるのかもしれない。

砂漠の土砂崩れ
（サウジアラビア）

現地から一通の業務用報告書が東京に届いた。持参した愛用のワープロで作成されたものである。一通り目を通したが、最後の一行の「乱筆、乱文」が目に入った。これを見たとたんに「乱文」はいつものことでありしょうがないにしても、「乱筆」の一語で、業務報告書の内容は一気に頭から消え去った。さすがにワープロの字は綺麗だが「乱筆」はないだろう。これではワープロに対してあまりにも無礼であり、ワープロが可愛そうだと一気に憤慨が高まったのである。Engineerとして不注意なことは「画竜点睛」であるとの思い込みからであろう。

受注後の第一回目の発注者、受注者による合同会議である。会議の冒頭、発注者の人事部長の挨拶で始まった。「本発電所は高い賃金のEngineerは採用せず、安い賃金のヒスパニック系の人たちによって運転されるものであり、運転操作は全てオン、オフだけの簡単に長時間運転継続出来るように設計してもらいたい」とのポリシーを話された。自家発電ではあるが、ガスタービン、パワータービンを含めた高度のシステムを内蔵した技術的にも高度のプラントであると自負していた、Engineer集団の会議である。

過去に人事部長の話が始まったこの種の会議は自分にとっても初めてである。話を聞かされてなるほどと思い、受注者として対応する姿勢を改めて自覚をさせられたのである。広い国土のアメリカでは発電所からの送電線埋設、受注設備等々の設置の費用を考えると、自家発電所の建設費がはるかに安価である。しかもカリフォルニアではヒスパニック系の人が多く住んでいる。建設工事が始まり、日本から廃熱ボイラーのサプライヤーのEngineerが何の予告もなしに突然訪ねてきた。来た目的は提出した図面は全て日本語で書かれており、特に備考欄には重要なことが書かれており、その説明に来たとのことであった。発注者のボスは「呼んだ覚えもないし、後日、滞在費、技術料等の一切の請求書は受け付けない。チームには大沢なる日本人Engineerがおり業務の進行には支障をきたしていない」との一喝である。小生にとっては正確に書いていることを話す手間は要するが、日本人、アメリカ人と国は異なるが、媒体は図面でありEngineer同士の会話は実に楽しいものである。滞在中の各種パーティーへの招待、帰国時の送別会などしてもらい、自分は満足した日々であった。

建設中の自家発電所の一部と苺畑
後方：カルフォルニアオックスフォード

この話も前段は前と同じようなものである。今度は人事部長の登場はなく、Engineerだけの会議であった。受注者の主眼はフルオートメーションシステムの採用での省力化である。これに対し発注者は「省力化は困る。人手は掛かっても良い。丈夫で長持ちするプラントが欲しい」と主張するのである。省力化は世界の潮流であり、発注者の意図が読み取れない。話は更に進み、実は「この国では雇用者の数によって法人税が減税される仕組みである。従って高価な金を支払ってフルオートメーションの採用に投資する金額より、法人税減額の方を採用する」との、あるEngineerの発言である。丈夫で長持ちするプラントの建設は受注者として当然のことであり、法人税減税までの効果は考えも及びもしなかった。事前調査の不足を指摘され、視野の狭さに一撃を食らってしまった。同じEngineerでありながら、省力化に夢中になる人と、やがては会社の幹部になると思われる人とは視野、視点が異なっていることには驚かされてしまった。しかし、ひたすら省力化を追い求めることも、Engineerの一つの姿ではないかと自分で自分を慰めている。

カスピ海は海抜マイナス28mと記憶していた。水は高いところから低い方に流れ、山から川へ、そして海へ流れるのは自然の理である。カスピ海に流れ込んでくる周囲の水は海抜マイナス28mでは海には流れ込めないのも自然の理である。太古の昔から同じ水位を保っているのは自分には謎である。確か死海の水面は海抜マイナス200mと記憶している。ここにも川からの水が流れ込んでいる。またトルファンの近くでは、これより更に低い場所もあると記憶している。幸いにもここでは流れ込む川はない。

イランのアルデビルに滞在中は厳冬期には帰国と決めていた。帰省中のある年の1月2日にカスピ海の水面が1m上昇し、国はナショナルプロジェクトとして洪水対策に緊急に対応していることを日本のテレビで知った。カスピ海の面積は日本国土の数倍の広さである。全海岸線の洪水対策は大変なことであろうとも思った。厳冬期も過ぎ3月に再赴任したときも水位は同じであった。時折り訪れた岸辺のレストランは床上浸水状態で、周りの立木も岸から遥か彼方に先端だけが見えた。国の洪水対策もブルドーザー台だけで、民家の周りを一軒ずつ土盛りで土手を築いている程度であった。ナショナルプロジェクトとは言い難いものである。各国から派遣されたEngineerとの話の中には、ボルガ川の水量が増えた、トルコからの流れ込む河のダムの水門を故意に開けて放水している等、洪水の原因に関する推測が乱れ飛んでいた。滞在地の標高は2300mであり直接的には関係ないが、岸辺のレストランで食事が出来なくなったことと、時々開かれるロシアからの物品を売る野外の市が開かれなくなったことで、いつか買い求めようとしていたバラライカが買えなくなったぐらいが自分に対する被害であった。その後洪水の話は立ち消えてしまい、今はどうなったかまったく知らない。

カスピ海沿岸の稲作田園風景
（イラン、アスタラ）

セメント工場近接稲作田園風景
（マレーシア、ランカイ島）

話は変わるがイランとパキスタンとの国境付近のイランのモスクが自爆テロで爆破され、数十人の死者がでたとの話も伝わってきた。この事件も、やれ誰の仕業だと憶測も流れ始めた。どうも宗教対立によるものだとの結論になった。「死んだ人は逸早くホメイニ師のそばに行けて幸せ者だ」と話をしていた人もいた。この人はEngineerであった。外国に赴任したら、そこでは政治と宗教の話をするなと教え込まれてきた自分には驚きであった。

カブルータはベネズエラのオリノコ河の中流にある町である。カラカス空港は海抜1000mである。空港を飛び立ったセスナ機は高度を下げ続けている。カラカスの町が視野から消えると、地上は熱帯雨林に覆われた緑の絨毯である。ベネズエラの第二の国歌といわれる「平原魂」の世界である。1時間半ほどのフライトでカブルータ空港に着陸した。空港とは名ばかりで滑走路は草茫々で長さも1000m足らずである。吹流しが一本立っているだけで、空港ビルも掘っ立て小屋である。空港にパイロットを待たせておき、やっとタクシーを拾ってプラント建設予定地まで行くことにした。空港からの道はまるで農道である。もちろん舗装もなく砂利道である。道の両側には農家がポツンポツンとあるだけである。

オリノコ河の船着場の土手に到着し、ドライバーをそこで待たせておき、そこで渡し舟を捕まえ対岸の船着場まで渡ることとなった。船頭の言うことには河の水位は乾季と雨季で8mも変わるとのことであった。船着場もそのときの水位に合わせて変えているとも話していた。訪ねた時期は生憎の乾季であり、流れは中央部だけの幅500m位だけであった。流れの岸までは泥の上に木道が敷かれており、その木道を歩いてやっと渡し舟に乗ることになる。対岸も同じである。木道を歩いた距離は右岸、左岸とも500m以上あった。雨季の川幅は数Kmになると船頭は話していた。たどり着いた対岸の町も農家が散在しており、道路も農道だけで舗装なしの砂利道である。とても町とは言えない。ここではプラント建設は出来ないとの結論を得てしまった。重さ30トン以上の重機物を、どうやって運ぶかのアイデアさえも頭には浮かんでこない。

待たせておいた船頭は夕食用のピラニア釣りに没頭していた。釣り方も牛肉の塊を荒縄に縛り、それを流れに放り込んで頃合を見て舟の中に引き上げるだけである。釣針のないこの方法は釣りと言えないのではないかと思われるのである。船頭の言うことにはピラニアの油揚げは美味しいものであると連発してご満悦であった。待たせておいたドライバー、パイロットも約束を守り待っていてくれた。ホテルや宿屋さえないこの町で置いてけぼりされてしまったら、一体どうなるのかなとの心配が危惧に終わったのは幸いであった。

とにかくカラカス事務所に到着した。事務所ではブラジルに住んでいる昔の上長からの電話があり、「わしは今ブラジルのサルバドルに住んでいる、カラカスまで来たのに何故来ないのだ、カラカスから3000Km足らずの距離だ、フライト時間は3時間少々だ、便名を知らせれば空港まで迎えに行く」ときついお叱りを受けた。私がカラカスにいることを昔の上司が知ったのは事務所の誰かの配慮であろう。たった一本の電話であったがEngineerの昔からのよしみを思い知らされた電話であった。社への現地調査の報告は「ここでは、とてもプラント建設は出来ない」だけの短いものとなった。自分の土産はピラニア釣りを見せてもらったこと、「平原魂」の歌詞の一節を実感できたこと、昔の上長の元気な声を聞いたことであった。